

生成文法から英語教育へ

—know howの世界に know whyが果たす役割—

2010.5.29
大阪教育大学
松本マスマ

はじめに

- 生成文法から英語教育へ
- 6つのGenerative Tips
- 生成文法にもとづいた中村(2009)の紹介
- 生成文法にもとづいた学生への指導の試み
- 3つの調査
- whyとhow

Generative Tip (1)

「英語教育は、変形文法が存在により、従来より少しでも賢くなる余地があるだろうか」

I. 変形文法の言語観

II. 個々の言語事実に関して変形文法が与える新知見

(安井稔 (1973)『英語教育の中の英語学』大修館書店, p.154)

生成文法から英語教育へ

I. 生成文法の言語観

II. 生成文法の方法論

III. 言語事実に関して生成文法が与える新知見

I. 生成文法の言語観

ミニマリスト・プログラム

「言語は、最適な設計(optimal design)をもつ完ぺきな(perfect)システムである。」

言語機能

- (1) 言語はヒトに固有の能力である
- (2) 目的: 言語機能の解明
- (3) UG(Universal Grammar)は、言語能力の生得的基盤である

言語の創造的特性

- 階層性
- 規則性
- 回帰性・離散無限性

[Taro thinks [that [Hanako knows [that [Jiro met Yuriko]]]]]

II. 生成文法の方法論

- (1) 演繹的アプローチ
- (2) 生成文法の5つの問い

生成文法の5つの問い

- (1) 言語知識とは何か
- (2) どのように獲得するか
- (3) どのように使用するか
- (4) どのように進化したか
- (5) 脳のメカニズムの中でどのように具現化されているか

(Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, p. 17)

III. 言語事実に関する知見

- | | |
|------------|---------------------|
| 1. 併合と移動 | 8. 能動受動文(中間構文) |
| 2. 制約と条件 | 9. 中間構文と能格文 |
| 3. 見えないもの | 10. 疑似受動文(前置詞付き受動文) |
| 4. 主要部 | 11. 補部と付加部 |
| 5. 語と文の対応 | |
| 6. 主要部パラミタ | |
| 7. 文から談話へ | |

1. 併合と移動

- (1) the man whom you can trust
- (2) [[_C φ_{EF}]]_{TP} you [_T can]]_{VP} [_V trust] whom]]
- (3) [_{CP} whom [_C φ_{EF}]]_{TP} you [_T can]]_{VP} [_V trust] **whom**]]

- (1) a. the present [_{SN} Taro sent **the present** to Hanako]
 ↓
 b. the present [_{SN} Taro sent **which** to Hanako]
 ↓
 c. the present [_{SN} which Taro sent to Hanako]

(中村 捷(2009)『実例解説 英文法』開拓社, p.209)

2. 制約と条件

- (1) a. What might he think that she is hiding?
 b. [_{CP} what [_C might] he think [_{CP} what [_C that] she is hiding what]]
 ↑ _____ | ↑ _____ |
- (2) might he think who has done what
- (3) *What might he think who has done?
- (4) Who might he think has done what?
 (Radford, A. (2009) *Analysing English Sentences: A Minimalist Approach*, Cambridge UP, p. 216)

Attract Closest Condition

“A head which attracts a given kind of constituent attracts the *closest* constituent of the relevant kind”

(Radford, p.216)

Wh疑問文

「...英語では疑問詞を文頭に移動し、主語・助動詞倒置を行います。」

(中村, p.16)

Wh疑問文

「疑問詞は文頭に移動しますから、that節がある場合には長距離の移動をします。この場合、疑問詞のものの位置を正確に見抜くことが大切です。」

(中村, p.16)

- (1) a. What do you think that John did to make money?
 b. Who do you think loves Mary?
 c. What does the teacher suppose that the student bought at the store?

3. 見えないもの

- (1) a. They want [John to help *himself*].
 b. *They want [John to help *themselves*].
- (2) a. John wants [to prove *himself*].
 b. John wants [**PRO** to prove *himself*].

(Radford, p.95)

意味上の主語

- (1)a. John tried [s_n to solve the problem]. [= John]
 b. John hopes [s_n to go abroad]. [= John]
- (2)a. John persuaded her [s_n to go out for lunch with him]
 [= her]
 b. John shouted to Bill [s_n to get out]. [= Bill]

「意味上の主語が主文の主語と同じか目的語と同じかは、主文の動詞の意味によって決まります」

(中村, p.149)

Generative Tip (2)

「今までばらばらに(無関係に)教えてきたことを**統一的に教える**ことができれば学習者の負担を減らすことができる。」

(岡田伸夫(2001)『英語教育と英文法の接点』美誠社, p. 24)

4. 主要部(head)

「句には必ずその中心となる語があり、それによって句の性質が決まります。」

(中村, p.3)

名詞句(NP): 名詞が中心となっている句

動詞句(VP): 動詞が中心となっている句

動詞句

動詞句(VP): 動詞が中心となっている句

- (1)a. 歌を歌う sing a song
 b. 彼にプレゼントをあげる give him a present
 c. ジョンが来ることを望む want John to come
 d. トムが賢いと思う think that Tom is wise

(中村, p.4)

5. 語と文の対応

「文とそれに対応する名詞形との間には規則的な関係がありません。」(中村 p.94)

- (1) a. The enemy destroyed the city. [能動文]
 b. The city was destroyed by the enemy. [受動文]
- (2) a. The enemy's destruction of the city [名詞形の能動形]
 b. The city's destruction by the enemy. [名詞形の受動形]
 c. The destruction of the city by the enemy.
 [目的語が移動していない形] (中村, p.95)

6. 主要部パラミタ

() 日本語では句の中心となる語が句の最後にくる。

() 英語では句の中心となる語が句の先頭にくる。

(中村, p.5)

7. 文から談話へ： 指示命令文

Cook beef ribs in oil in Dutch oven over medium heat until brown; **drain**. **Stir** in broth, horseradish and salt.

(*Betty Crocker's Cookbook: Sixth Edition* (1986). Bantam Books, p.375)

[_{TopP} DT Top [_{TP} T drain *pro*]]

DT: discourse topic (文脈話題)

指導の試み：「意味上の主語」を目的語にも応用

意味上の目的語

Cook beef ribs in oil in Dutch oven over medium heat until brown; drain . Stir in broth, horseradish and salt. [= beef ribs]

「drainとstirの意味上の目的語は、文脈における話題であるbeef ribsをさしています。」

8. 受動文と能動受動文(中間構文)

Word squares are sequences of letters using words of equal length which **read** in horizontal, vertical, and occasionally diagonal directions. Usually the words are the same in each direction, but in double word squares, they **read** differently:

```

O R A L
M A R E
E V E N
N E A T

```

(David Crystal (1988) *The English Language* Penguin Books, p.114)

Generative Tip (3)

「よい訳読方式においては、単なる訳語の置き換えではなく、内容に関する真の理解が常に意図され、**特定構文の深層構造**(つまり、意味に関する最も基本的な情報をになっていると考えられる構造)に対する配慮が見られ、同時に、**その構文の前提条件**は何であり、また、**含意は何であるか**、というようなことに対する配慮もみられることになるであろう。」

(安井, p. 158)

受動文

(1) a. John invited Mary.

b. Mary was invited by John

↑ _____ |

(中村, p.270)

能動受動文

「形は能動形で意味は受動の意味を表す動詞を能動受動動詞とよびます。能動と受動の間のような性質をもっていることから中間動詞とよばれることもあります。」 (中村, p.278)

- (1) a. This car drives smoothly.
b. This door opens easily.
c. This book reads hard.

能動受動文

- (1) a. ____ drives this car smoothly.
↑ _____ |

b. This car drives smoothly.

(中村, p.278)

9. 中間構文と能格文

- (1) a. Mary broke **the vase**.
b. **The vase** was broken.
c. **The vase** breaks easily. 中間構文
(能動受動文)
d. **The vase** broke suddenly. 能格文

「英語学研究法」(コース専門科目)での調査

2010年5月

Levin, Beth (1993)

English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation,

The University of Chicago Press.

対象学生

教養学科		
欧米言語文化コース(英語圏)	3回生	9名
	4回生	1名
(仏語圏)	3回生	1名

背景

- (1) 英語圏の学生全員は、昨年「言語学概論」で、**統語論の入門**(主にGB理論の枠組み、**受動文**(「意味役割」**移動**を含む)まで)を学んでいる。
- (2) 英語圏の3回生学生のうち4名は、昨年「言語学研究法」で、**受動文**(半年以上)、**中間構文**(2コマ程度)について、学んだ経験がある。
- (3) 「英語学研究法」の授業で、Levin (1993)を中心に、**中間構文と能格文**について、**3コマ、実質3時間以上**、学んでいる。
「意味役割」については学んでいるが、「移動」についてはまだ学んでいない。

作業

1. 検討する語の、辞書における他動詞と自動詞の全ての語義を与える。
2. その中の自動詞の語義の中から、中間構文と能格文に相当する語義を全て選ばせる。
3. 中間構文には「動作主」の意味が含まれていること、副詞を伴っていても必ずしも中間構文ではないことを、ヒントとして与える。

辞書の語義と中間構文

『小学館プログレッシブ英和中辞典（第4版）』

translate, photograph, read

break, drive, cook

(cut)

- read 自(←他) 1 読む, 読書する: (指などで) 記号などを読む
| ~ extensively [intensively] 多読[精読]する。
- 2 [I 副](...に) 音読してやる (to ...) | ~ to a child every evening 毎晩子供に本を読んでやる / ~ before a large audience 大ぜいの聴衆の前で朗読する。
- 3 (英古風) (...のために) 研究する, 勉強する (for); (...を) 専攻する (in ...) | ~ for a degree in physics 物理学の学位を取るために勉強する
- 4 [I 副](...について) 読んで知る[学ぶ](of, about ...)。→進行形不可。→他 1 | I have ~ about the big earthquake. その大地震のことは読んで知っています。
- 5 <本などが> (...のように) 読める; (...と) 書いてある, 表現されている, <が> ...と (...に) 解される, 解釈される (to ...)。→進行形不可 | This novel ~ s well. この小説はおもしろく読める / The message ~ s as follows. 伝言には次のように書いてある / The letter ~ s like a threat. その手紙は脅迫状みたいだ。
- 6 <機器が> 数値などを示す[表す]。7 [コンピュータ] データなどを読み取る。

	項目 番号	語義	中間構文	能格文
translate	2	<作品などが> 訳せる	5	6
photograph	2	写真に写る	7	1
read	5	<本などが> (...のように) 読める; (...) 書いてある, ...	6	3
break	1	割れる, 粉々になる, ...	3	4
	2	故障する, 壊れる, ...	3	1
drive	1	[車を] 運転する, ... <車が> 運転しやすい[しずらい]	4	3
	2	<車・船などが> 前進する, 進行する, 突進する, 疾走する	3	2
cook	2	料理される, 煮える	3	4
	3	<人が> (器さで) удар	2	3

結果のまとめ

- (1) 中間構文でのみ用いられる動詞の方が、中間構文と能格文の両方で用いられる動詞よりも中間構文の正解率が高い。
- (2) 中間構文と能格文の両方で用いられる動詞の場合、中間構文と能格文のどちらかであるという判断をする場合の正解率も低い。
- (3) 中間構文(能動受動文)と能格文を完全に区別するためには、かなり高度な言語学的知識が必要である。
(「意味役割」「NP移動」「含意的動作主」「アスペクト」「時制」など)

Generative Tip (3)

「よい訳読方式においては、単なる訳語の置き換えではなく、内容に関する真の理解が常に意図され、**特定構文の深層構造**(つまり、意味に関する最も基本的な情報をになっていると考えられる構造)に対する配慮が見られ、同時に、**その構文の前提条件は何であり、また、含意は何であるか**、というようなことに対する配慮もみられることになるであろう。」

(安井, p. 158)

指導の試み: 日本語訳の活用

- (1) Taro cooked tofu.
 (2) Tofu cooks quickly.
 (3) Tofu cooks quickly.
 ↑ ↓
 (4) The tofu cooked quickly.

(2) の中間構文は、(3) のように最初Tofuが(1)と同じように目的語の位置に現れるが、その後、目的語位置から主語の位置に移動する。

(2) の文は、「豆腐はすばやく料理できる」という意味で、「料理する人」が含意され、豆腐についての特徴を述べている。

一方、(4)は、「その豆腐はすぐ煮えた」という出来事を述べる文で、「料理する人」は含意されていない。
 (2)だけが現在形なのは、(2)が主語の一般的な特徴を述べる文だからである。

10. 疑似受動文(前置詞付き受動文)

- (1) a. Everyone **objected to** the plan.
 b. The plan was **objected to** by everyone.
 (2) a. The manager **asked about** the sales effort.
 b. The sales effort was **asked about** by the manager.

「これらの「動詞 + 前置詞」の結合はきわめて緊密であって、「動詞 + 前置詞」を一つの動詞と考えることができます。」 (中村 p.274)

言語学概論(文化研究専攻共通科目)における調査

2009年11月実施

欧米言語文化コース(英語圏)	2回生	11名
	3回生	2名
欧米言語文化コース(独・仏語圏)		4名
日本・アジア言語文化コース		1名
社会文化コース		1名

10月から統語論を学ぶ。句の構造や主要部の概念については既に学んでいる。

Generative Tip (4)

「いかにも良さそうだけれども**ダメな文**で、しかも学生がつまづきそうな、そんな**ダメな文**を教えてやるのがベストである。」

(畠山雄二(2006)『言語学の専門家が教える新しい英文法』ベレ出版, p.4)

補部と付加部

- (1) a. He relied **on the doctor** during the operation.
 b. *He relied during the operation **on the doctor**.
 (2) a. The doctor was **relied on**.
 b. *The operation was **relied during**.

(中島平三(1995)『ファンダメンタル英語学』, p.14-p.15)

質問

- (2a)と(2b)の違いを説明しなさい。
 (1) a. He relied on the doctor during the operation.
 b. *He relied during the operation on the doctor.
 (2) a. The doctor was relied on.
 b. *The operation was relied during.

今日の説明は、英語の学習の役に立つと思いますか。

今日の話は、英語の学習に役に立つか

- 役に立つ …………… 13名
(うち、「英作文に役に立つ」 …… 4名)
- 一部役に立つ …… 3名
(「言語学・英語学や文法を研究する場合は役に立つはずですが、それ以外のスピーキングやリスニングでは役に立たないと思います。」)
- 役に立たない …… 3名

英語を専門とする学生

- (1) ある程度専門用語を使って説明しても、理解できる。
- (2) 文の「構造」を知ることが具体的にどのようなことに役に立つか、指摘できる学生もいる。
- (3) 統語論をどうしても理解できない学生もいる。

英語Ib(共通基礎科目)における調査

2009年11月実施

教養学科1回生 32名

人間科学専攻

自然研究専攻

健康科学専攻

前期英語1aの受講生が引き続き受講。

テキストは、DVDを用いたBBCのビデオクリップ教材

自動詞 + 前置詞の結びつきの強さ

- (1) a. He relied on the doctor during the operation.
b. *He relied during the operation on the doctor.
- (2) a. The doctor was [relied on].
b. *The operation was [relied during].

(中島平三(1995)『ファンダメンタル英語学』, p.14-p.15)

質問

この説明は、どの程度わかりましたか。

英語を学ぶのに役に立つと思いますか。

この説明は、どの程度わかりましたか

回答	人数
よくわかった	4
わかった	4
だいたいわかった	9
一部わかった	11
何らかの点でわかった	3
無回答	1
合計	32

英語を学ぶのに役に立つと思いますか

回 答	人 数
役に立つ	21
一部役に立つ	6
役に立たない	3
無回答	2
合計	32

「海外で話すために英語を学ぶなら細かい文法は必要ないと思う。」

「英語を研究するという意味では役立つと思うが、英会話にはあまり役立たないと思う。」

「より英語の理解が深まるので、良いと思う。でも、自動詞と他動詞の違いがはっきりとわかっていない人に、この話をすると逆効果と思う。」

英語を専門としない学部生

- (1) 専門用語の使用を避けて、文の構造を利用した説明をすれば、内容によっては、ある程度理解できる。
- (2) ある程度役に立つと思っているが、「何に役に立つか」については、特に意識していない。
- (3) 「何に役に立たないか」については、「英文法」はコミュニケーションに役に立たないと思っている学生がいる。

Generative Tip (5)

「生成文法理論に基づいた第二言語習得研究は、外国語教師の心得として有効な示唆を多く与えてくれるのではないかと考えている。」

(白畑知彦(2008)「生成文法は外国語教育にどのような貢献ができるか」『月刊 言語』37.11, p.64)

SLA (第2言語習得)

- (1) a. **The vase** broke suddenly. 能格動詞
b. Mary broke **the vase**. 使役動詞
- (2) a. **The train** arrived quietly. 非対格動詞
b. *The station arrived **the train**.
- (3) a. John laughed. 非能格動詞
b. John laughed a mirthless laugh. 同族目的語構文
c. *John laughed Mary.

非対格動詞の受動化

- (1) a. *Most of people *are fallen* in love and marry with somebody.
 b. * ... the most important trouble *was happened*.
 c. *You will notice that many year-end gifts have *been arrived*.
 d. *However, one question *is still remained* unsolved.

(山川健一 (2008) 『英語の非対格動詞の第二言語習得』, 安田女子大学言語文化研究所, p. 17)

非対格動詞の習得に関するまとめ

非対格動詞の過剰受動化がみられる
 非対格動詞の適格文(NP+V)を拒否する傾向がある
 名詞句が拘置され、虚辞を伴うときがある
 中級や上級の学習者においても誤りが見られる
 非対格動詞とは異なり、非能格動詞の誤りはあまり観察されない
 上記の現象は存在するが、大部分の学習者は非対格動詞を正しく習得している
 特に の現象について、発達のU字曲線(U-shaped curve)が見られる Oshita (1997, 2001)より

(山川, p.61)

Oshita, H. (1997) *The unaccusative trap: L2 acquisition of English intransitive verbs*. Ph.D. dissertation. University of Southern California, LA, California.

Oshita, H. (2001) "The unaccusative trap in second language acquisition." *Studies in Second Language Acquisition* 23, 279-304.

非対格性の習得モデル(1) Oshita (2001)

第1段階 (fallの場合) (Oshita, 2001: 287に基づく)

語彙概念構造: [y FALL] (target)

↓ ←結び付け規則 (non-target)

項構造: (y)

D構造: [y [VP FALL]] (non-target)

↓

S構造: Y falls. (non-targetであるが表面上は適格文)

(山川, p.62)

第2段階 (fallの場合) (Oshita, 2001: 288に基づく)

語彙概念構造: [y FALL] (target)

↓ ←結び付け規則 (target)

項構造: < y >

D構造: [e [VP FALL y]] (target)

↓ ← NP movement (non-target)

S構造: Y is fallen. (non-target)

(山川, p.63)

第3段階 (Oshita, 2001: 289に基づく)

語彙概念構造: [y FALL] (target)

↓ ←結び付け規則 (target)

項構造: < y >

D構造: [e [VP FALL y]] (target)

↓ ← NP movement (target)

S構造: Y falls. (target)

(山川, p.63)

非対格性の習得モデル(2) 山川(2009)

第1段階

非対格動詞arrive は、「二つの語彙概念構造」をもつ

(1)a. 自動詞の場合

[y BECOME [y BE at Z]]

b. 他動詞の場合 (語彙使役化)

[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

(1a)のD構造 — arrived **the train**.

(山川, p.85)

第1段階(1)

(1)a. 自動詞用法

[y BECOME [y BE at Z]]

b. 他動詞用法 (語彙使役化)

[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

(1a) → D構造 → S構造

カテゴリA: Your letter arrived yesterday.

(1a) → D構造 → **誤ったNP移動** → S構造

カテゴリC: *Because of the rain, the train **was arrived** late.

(山川, p.85)

第1段階(2)

(1)a. 自動詞用法

[y BECOME [y BE at Z]]

b. 他動詞用法 (語彙使役化)

[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

(1b) → D構造 → S構造

カテゴリE: *Finally the waitress arrived the salad to us.

(1b) → D構造 → **受動化** → S構造

カテゴリC: *Because of the rain, the train **was arrived** late.

(山川, p.85)

第2段階

語彙概念構造(1b)を廃棄

→ カテゴリE、**カテゴリC**が減少

(1)a. 自動詞用法

[y BECOME [y BE at Z]]

b. 他動詞用法 (語彙使役化)

[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

(1b) → D構造 → S構造

カテゴリE: *Finally the waitress arrived the salad to us.

(1b) → D構造 → **受動化** → S構造

カテゴリC: *Because of the rain, the train **was arrived** late.

(山川, p.86)

第3段階

語彙概念構造(1a)の表象の定着

→ カテゴリAとカテゴリEの正答の平均点安定

しかし、時折NP移動が生じる。

→ **カテゴリC**

(1)a. 自動詞の場合

[y BECOME [y BE at Z]]

b. 他動詞の場合 (語彙使役化)

[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

(1b) → D構造 → S構造

カテゴリE: *Finally the waitress arrived the salad to us.

(1b) → D構造 → **誤ったNP移動** → S構造

カテゴリC: *Because of the rain, the train **was arrived** late.

(山川, p.86)

指導の試み: モデルごと、段階ごと(1)

(1) Oshita (2001)のモデル

第2段階での間違い: 「fallは受動態にできない。」

第2段階 (fallの場合) (Oshita, 2001: 288に基づく)

語彙概念構造: [y FALL] (target)

↓ ← 結び付け規則 (target)

項構造: < y >

D構造: [e [_{NP} FALL y]] (target)

↓ ← NP movement (non-target)

S構造: Y **is fallen**. (non-target)

指導の試み: モデルごと、段階ごと (2)

(2) 山川(2009)のモデル

第1段階での間違い(1):

(1a)の語彙概念構造: 「arriveは受動態にできない。」

(1a). 自動詞用法

[y BECOME [y BE at z]]

b. 他動詞用法 (語彙使役化)

[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

(1a) → D構造 → S構造

カテゴリA: Your letter arrived yesterday.

(1a) → D構造 → 誤ったNP移動 → S構造

カテゴリC: *Because of the rain, the train was arrived late.

指導の試み: モデルごと、段階ごと (3)

(2) 山川(2009)のモデル

第1段階での間違い(2):

(1b)の語彙概念構造:

「arriveは自動詞なので受動態にできない。」

(1a). 自動詞用法

[y BECOME [y BE at z]]

b. 他動詞用法 (語彙使役化)

[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

(1b) → D構造 → S構造

カテゴリE: *Finally the waitress arrived the salad to us.

(1b) → D構造 → 受動化 → S構造

カテゴリC: *Because of the rain, the train was arrived late.

指導の試み: モデルごと、段階ごと (4)

(3) 山川(2009)のモデル

第3段階での間違い:

「arriveはhappen等と同じ(非対格)動詞なので、受動態にできない。」

(1a). 自動詞用法

[y BECOME [y BE at z]]

b. 他動詞用法 (語彙使役化)

[x ACT (on y)] CAUSE [y BECOME [y BE at z]]

(1a) → D構造 → S構造

カテゴリA: Your letter arrived yesterday.

(1a) → D構造 → 誤ったNP移動 → S構造

カテゴリC: *Because of the rain, the train was arrived late.

Generative Tip (6)

「英語でコミュニケーションをするためには、まず英語の形と意味の対応関係を表す知識、すなわち英文法を習得していなければ話にならない。」

(岡田, p.17)

TOEFLと「文法」

The TOEFL® test measures **your ability to communicate in English** in colleges and universities.

(ETS HPより)

TOEFL iBT

- Reading
- Listening
- Speaking
- Writing

Rating of Speaking

- Delivery
- Language use
- Topic development

(TOEFL iBT Tips p. 28)

Language use

How effectively does the test taker use **grammar** and vocabulary to convey their ideas? Raters determine the test taker's ability **to control both basic and more complex language structures**, and use appropriate vocabulary.

(TOEFL iBT Tips p. 28)

生成文法と第二言語習得研究

(1) 生成文法から第二言語習得研究へ

- I. 生成文法の言語観
(例 UG)
- II. 生成文法の方法論
- III. 言語事実に関する知見
(例 非対格性、NP移動、語彙概念構造)

生成文法と第二言語習得研究

(2) 第二言語習得研究から生成文法へ

- I. 生成文法の知見に関する第二言語による実証
- II. 第2言語学習/外国語学習における習得順序

生成文法と英語教育(研究)

(1) 生成文法から英語教育(研究)へ

- I. 生成文法の言語観
- II. 生成文法の方法論
(例 「なぜそうなるのか?」)
- III. レベルに合わせた言語事実に関する知見による指導
- IV. 「文法はコミュニケーションにとって大切」

explanatory adequacy

- (1) UGに関する理論は、自然言語の文法の特徴について「説明」できなければならない。
- (2) 「なぜ、人間の1言語の文法はそのような特性をもつのか」というのに答えることができないならない。

(Radford, p.13)

生成文法と英語教育研究

(2) 英語教育研究から生成文法へ

生成文法の観点・事実に関する知見を外国語教育に活かすスキルへのヒント
(例 文法の専門用語をつかって、学生が退屈しないのは、どの程度までか、ICTによる英文法学習の動機付け)

各レベルの学習者にとって、どこまでが必要か
(例 小学生は名詞についてどこまで知ればよいか)

SLAの成果を外国語教育に活かすスキルへのヒント

Why → How

←

To know how

- ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術)による英語教育
- 教授法

To know why

- なぜそうなるか？
- 自分で答えを探す→自律的学習へのヒント

ご静聴ありがとうございました。

発表後の質疑応答

Q1 いわゆる「外国語としての日本語」文法を教えながら、英語を意識させ(対照させ)学ばせていくことは、日本の英語教育としてはどうなのだろうか。

A1 個別言語としての日本語と英語を考えた場合、主要部の位置に関しては、主要部末端言語と主要部先端言語という違いがあります。

本日の発表でも、学生の文法の指導における「日本語訳の利用」についてお話しをさせていただきましたが、日本語と英語を比較しながら英文法を指導するのは効果的な方法かと思います。

Q2 最近、NHKの基礎英語I, II, IIIを聞いていて、私が昔習ったような文法用語(be動詞 + 過去分詞)を使っているようだが、この流れは新しいことと言えるのだろうか。

また、「チャロの冒険物語」のような英語の教え方について、先生方のご意見をお聞かせ下さい。

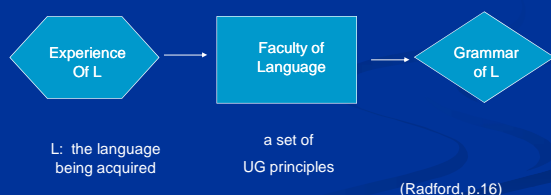
A2 大学の文法も中・高の文法の延長上にありますから、文法用語も、いわゆる「学習英文法」を多くの場合使うことになります。

ただ、ご指摘のように、昨今の大学生は、大学までに文法用語を積極的に使用した指導を受けていない場合も見られます。このような学生には、「英語の初年次教育」の中で、かんたんな学校文法を指導することも考えられます。

NHKの語学番組は、私も学生に積極的に利用するように指導していますが、特に、インターネットでも学習できる「ニュースで英会話」を自習用教材として学生に勧めています。

付録

言語生得説



英語を専門としない学生のカリキュラム

- クラス分け試験
- 「英語再入門」(初年次教育)
 - ・高校英語との橋渡し、自律学習への導入、「文法は大事」
- 「基本技能 Reading, Listening, Writing, Speaking」
 - ・単位数に応じて、統合的指導も。CALL等で効率化
- 「英語を通して何かを学ぶ」
 - ・時事問題、他専攻教員の協力(専門書の講読、留学生のための英語の授業)、TOEIC(社会を学ぶ)、etc.
- 「ネイティブ教員による会話等の授業」
 - ・語学研修でも単位認定

英語初年次教育の例

(「ことばへの招待Ⅰ」(大阪教育大学教養基礎科目))

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 大学の英語とCALLシステムの使い方(1)
- 第3回 CALLシステムの使い方(2)・ラジオを聞こう
- 第4回 図書館に行こう
- 第5回 インターネット
- 第6回 英語学習雑誌と英字新聞
- 第7回 TOEFL説明会(CIEE担当者)
- 第8回 交換留学と英語学習(ゲストスピーカー)
- 第9回 洋書を読んでみよう
- 第10回 英文レターとe-mail
- 第11回 ジャパニーズイングリッシュ
- 第12回 文法はいらない?
- 第13回 英語の資格
- 第13回 語学研修
- 第14回 *Times*試験
- 第15回 これまでのまとめ

英語教員志望の学生のカリキュラム

- 音声学
- 英語科教育法(大学教員+高校/中学/小学校教員)
- 外国語教育研究
- 第2言語獲得研究
- 語法研究
- 生成文法・認知言語学(「英語学概論」と連動)
- 語学研修(ホームステイを含む)
- 日本語